

Title	コミュニケーションが築く高質の対人関係 : 社会性の維持・回復を目指すために
Author(s)	大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 6 P.1-P.6
Issue Date	2006
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/4528
DOI	10.18910/4528
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コミュニケーションが築く高質の対人関係 —社会性の維持・回復を目指すために—

大坊郁夫(大阪大学人間科学研究科)

相互の共通性と違いを前提とした他者との関係こそが社会の基盤となる。この対人関係を実体化するためにはコミュニケーションが必要であり、これなくして、歴史につながる社会は生まれない。個人の認識できる範囲において、意味を持つ世間は急速に矮小化しつつある。それ故に、現実の他者との試行錯誤によって築かれる紐帯は脆弱となり、このような個々人のぶれを含んだ社会的共有の基盤は崩れてくる。戦前世代から戦後世代への生活スタイルの変化に見られる価値観の推移、団塊世代の自己主張とそれに続く団塊ジュニア世代さらに後続の世代に反映されている時代的变化に見られる意識を検討する必要がある。戦前戦後における社会的な価値の変動とそれに続く世代の拡散した多様な生活スタイルが世代間で伝承されることなく、後の世代にモデルが提示されなかったことは、現代における対人関係に大きな影響を与えている。人はそれぞれに異なる歴史と環境を持っており、互いを理解することはそれぞれの異文化を理解することと言ってもいい。そのためには、幸福や健康を目指したコミュニケーションの効用を十分に理解した上で、相互協調的な高質な社会を築く努力が求められる。

キーワード: 対人関係、対人コミュニケーション、社会性、wellbeing

現代のコミュニケーション状況を考える

人は、自分一人では自身の特徴を十分には理解できず、他者との関係の中であって、他者との「比較」を通じて自分を捉えることができるものである。他者との相互作用の中であって、自分の言動に対して相手がどのように反応するのか、その反応を読み取ることによって、自分の特徴を社会的なものとして理解することができるのである。唯一の存在であっては、比較するものがないので自他の区別はできず、したがって、自分という概念は生じ得ない。われわれは比較される(する)ように仕向けられているのである。個人であれ、対人関係であれ、人を考えるためには、このような視点は不可欠である。

現代の個人、他者との関係を考える際には、いくつかの視点がある。その一つとして、自分と他人とは多様な意味で違うということを強調しようとする「区別」指向が挙げられる。「個性化の時代」と言われ、他人との違いをあえて強調しようとする傾向である。他人との類似性は、親和性を促す要因であり、好まれはするが、同時に、「この人と私は違う」ということを重視しがちである。すなわち、大枠的には、他者との同調性を基調としながら、自己確認の欲求を持っている。さらに、対人関係の特徴を考えると、自分の現在の(とにかく続行できている今の)状況をなるべく変えたくない。いつもの慣れた生活状況には馴染みがあり、特別のコストがかからず、快適である。自分の世間という一種の当たり前の小世界において、何人かが互いにあまり影響を与えることもなく、浮遊している。そこに他の人が新たに加わるならば、窮屈になるのでそれを好まず、変化を好まずに保守的になりやすい。このような心理的な傾向から、しだいに、居心地のいい世間も狭

いものになり、同類と認め得る他者についても狭い範囲で選択している。また、自分のいる世間については、防壁を厚くし、その内集団に対しては相応に自己開示し、親密であり、友好的であるが、少しでもそこから外れた他者に対しては排除する。したがって、新たな他者との交流にも抵抗が大きくなっていると考えられる。

共同的というわけではなく、単に個人として快適さを優先して求める傾向が増してきているので、他者とのコミュニケーションの機会が減少し、相互の違いを前提としてコストを注いだ関係を築くことを避ける傾向がある。そして、「今」の多数の刺激に注意が向きやすく、それへの対処に忙しく、先を見通せないでいる。さらに、インターネットや携帯電話などの間接的なコミュニケーション機会の飛躍的な増大があり、多くの者との浅いレベルのコミュニケーションが繰り返され、それ故に思考は断片的となり、沈思することが減退している嫌いがある(柳田,2005)。このようなことからすると、同じ目的達成のもとに長い時間を共有し、相互作用機会の多い、連携することによる成果が期待できるはずの職場においては、個人が自分なりの生活空間を築くことは難しい。したがって、過剰なエネルギーを用いて、自分「だけ」の世界を作ろうとして、相互の相互作用を遮断しようとする兆しすら見られる。

職場内においては、「仕事」についてだけのコミュニケーションに終始し、個人的な開示をせず、職務上の関係から個人の領域に出ることを嫌う。仕事以外の活動(親睦の活動—忘年会、仕事の打ち上げの慰労会など)を避け、他者への個人的な関心を敢えて寄せようとはしない。

社会的なシステム内で生活している者でありながら、近年の社会的な志向性の減退は多くによって指摘される

ところである(大坊,2006; 柳田,2005 など)。他者への配慮、世間への考慮、双方向の密度の高いコミュニケーションなどが十分ではなく、お互いを支え合う社会的なサポートが乏しく、理解不足や軋轢によって容易に不適應を生じやすくなっていることがうかがわれる。その結果、個々人の孤立を促し、集団や組織の連携的な行動が不十分になりつつあると言える。

このようなことから問題となることは、自分を護るための行動の試みは、自己の囲い込み、選択的な相互作用重視(他者との社会的相互作用の回避)、他者への無関心として表れ、自分を適切に参照できるつながりが乏しくなるので、社会的な「紐帯」が希薄となり、適応力も減退しつつあることである。

われわれは、誰もがア・プリオリに自分の人生に一定の規範を課せられているわけではなく、生き方を選択可能である(ことになっている)。ただし、そこには多くの前提があることを大方は知っているはずである。

ここで特に指摘したいことは、「他者」との相互作用の蓄積がわれわれの社会性を築き、そのプロセス自体が社会を構成していることにある。すなわち、日常的な事実として、あるいは、仮想的なものであれ、他者との関係が考慮される限りにおいて、「社会」は意味を持つということである。大方にとっては、このような説明は不要であり、これを暗黙知として社会は成立している。しかし、近年、それが大方の共有概念であるかどうか疑わしい出来事が少なからず現れてきている。自己との対比及び自己を内包するものとしての「社会」という意識を持たない、いわば社会的リアリティの欠如の心性を想定せざるをえない出来事である。他者とのかかわり合いを前提とせず、他者との関係によって自分が成立することに気づけない者がいることを認めざるをえない例があることである。おそらく、このような心性を持つ者は唐突に登場したのではなく、過去にもいたであろうことは想定できる。登場事例の多発というよりも、社会を判断の基準枠としない、「社会レス」とも言い得る心性にこそ現代的な意味がうかがわれる。

社会に帰属しきれず、一人称社会へ

社会性の意識の希薄な者の存在を無視できない典型例を近年のいくつもの事件に求めることができる。事件であることは既に他者とのかかわりを抜きにはできないことであるとも言えるが、当事者の認識においては、あくまで当事者の一人称でしか成立していないものである。例えば、2005年 11月の姉妹殺人事件(数年前の母親殺しを引きずる殺人に伴う快感情の再体験としての犯行)、同じく11月のペルー人による少女殺害事件(この犯行は、自分ではなく、悪魔にそそのかされたためと述べている)、1997年の神戸の児童連続殺傷事件の酒鬼薔薇聖斗(バ

モイドオキ神を作り出し、それへの服従行為としての犯行であるとの分離的な意識)、1988~1989年の連続少女殺人事件の宮崎勤(自分を受け入れてくれていた祖父の死によって、自分をサポートする者の喪失感からの絶望による自己否定の「確認」としての犯行)などにある種の典型を見ることができる。

これらの犯罪においては、容疑者は自分をどう社会に結びつけていいのかが不確かであり、自分の行動の基盤となる規範を生み出す世間、「社会」をイメージできていないと考えることができる。あくまで自分が勝手に描いただけの世間でしか考えておらず、他者との共通項を生み出すことに関心がない。その人生において、双方向的なコミュニケーションによって自己概念が成立していることに「気づいていない」。勝手に描いたイメージだけで判断・行動できるという錯覚を持っているとも言える。正しく自分の認知世界という狭い世間でしか他者や場面を考えられていない。それ故に、他人が彼らを「反社会的」と評しても、当事者自身からすると、「反」社会と言えないような基盤となる「社会」認識を持っているのではなく、自己の参照としての社会を意識しているとは言えない。そうすると、これは反社会とうのではなく、むしろ、社会性を持ち合わせていない「社会レス」、つまり、「無社会性」と考えることが可能であろう。そう考えた方が説明し易い。

最近の高校生意識についての国際比較調査結果にも同様な傾向は認められる(財団法人青少年問題研究所, 2006)。この結果は、日米中韓の高校1~3年生計約7200人を対象に2005年に実施したものである。Table 1にあるように、従来、社会的にのぞましいとされてきた奨励や集団の成果につながるような指向性が低く、将来への希望の念が希薄化している特徴がうかがわれる。

また、日本の高校生が他の3か国に比べ、「非常に関心がある」と回答した割合が高かった項目は、漫画やドラマなどの「大衆文化」(62・1%)、「携帯電話や携帯メール」(50・3%)、ファッションやショッピングなどの「流行」(40・2%)など。米中韓でいずれも50%前後だった「家族」は、日本では32・4%にとどまっている。

Table 1 どんなタイプの生徒になりたいか(複数回答、%)

選択肢(抜粋)	日本	米国	中国	韓国
勉強がよくなる生徒	40.5	83.3	79.5	67.4
リーダーシップの強い生徒	15.7	54.1	53.0	48.7
クラスの皆に好かれる生徒	48.4	21.6	66.2	41.4
先生に好かれる生徒	13.9	3.8	49.9	35.8
正義感の強い生徒	25.7	32.7	54.5	35.8

財団法人日本青少年問題研究所(2006)

また、他の3カ国と、日本の高校生の回答が大きく違ったのは、「現在、一番大事にしていることは」という設問だった。3カ国が多くの「希望」に丸をつけたのに、日本の生徒の回答は圧倒的に「やりたいことがない」という結果になった。日本の高校生は、「希望するもの」として挙げた割合が最も高い「友人関係がうまくいく」でも4割以下である。進路についても、大学院を目指す割合も4カ国で最低の7.2%だった。親友がいない割合は7.0%と最も高く、親からほめられたり、期待を感じる割合も他国に比べて低く、友人関係や親子関係の薄さも目立った。

これらの特徴は、多くのことを示唆している。享乐的で、「人並み」意識が強く、向上指向の意欲が乏しい。将来への展望が漠然としており、かつ、今現在の生活へのコミットメントが乏しい。社会的なつながりについても、友好や楽しみを求めることが基本となっており、積極的に将来を切り拓いていこうという姿勢に乏しい。彼らが抱いている「社会」というものが、ごく狭い身近な範囲に限られており、拡がりがない。将来へ続く時間的な拡張性も乏しい。

このような意識は短時間に形成されるものではない。少なくとも、戦前世代から戦後世代への生活スタイルの変化に見られる価値観の推移、団塊世代の自己主張とそれに続く団塊ジュニア世代、それに続く世代に反映されている時代的变化に見られる意識(経済、テクノロジーに密接につながる社会意識に表れる)を検討しなければならない。その基本となることは、それぞれの世代に伝承されてきた生活展望の閉塞感であろう。つまり、戦前戦後における社会的な価値の変動とそれに続く世代の拡散した多様な生活スタイル、その成果が世代間で伝承されることなく、後の世代にモデルが提示されなかったこと、社会的な価値の多様化や個性の重視と言われはするものの、それを実現できる社会的許容性がないこと(多くの選択が必要な若い世代にとって現実的に選択できるモデルが提示されないのに、選択だけが迫られているのが現状)、一共通の尺度となっているのは、ほぼ唯一といえる学校の成績とそれにつながる学校ブランド格差や職業格差がある一、さらに、社会的な相互連携の規範が生活のモデルとして推奨されず、個々人は「それぞれであれ」とだけが喧伝されている。したがって、モデルの選択も、生活の方針も決定することは促進されずに遅延する。それを正当化するには、積極的な行動決定、一定のモデルを受容することを避けるには、責任を問わない(問われない)、かつ、将来を積極的に考えず、選択を行わないことが得策となる。このような心理性が前述したような若者の意識として表れていると考えることができる。換言するならば、積極的な社会的連携を求めない、むしろ、つながりを切り離し、「個」でいることの居心地のよさが、浸透しつつあることが示されていると言えよう。

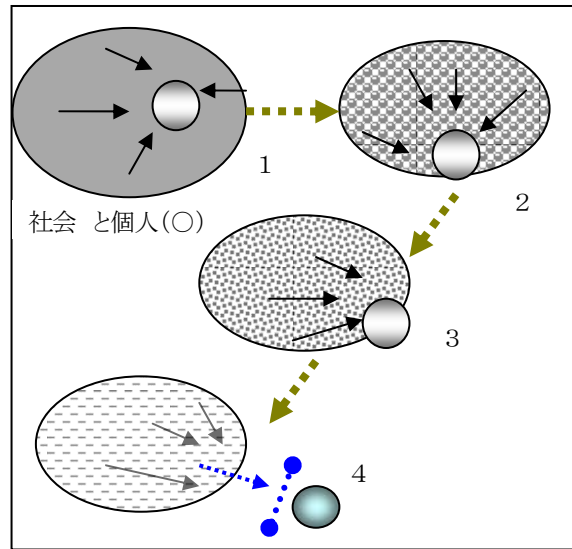


Figure 1 個人の心理的な安定は社会へ帰属、離脱によって左右される

社会(世間)に所属する個人は、有形無形の期待を受けている。一定の社会的規範を共有し、自分の目指すモデルが与えられる限りにおいては、受ける期待は、内在化され、アイデンティティの基礎となる。しかし、選択可能なモデルが明瞭ではない場合には、他者と共にいること自体が圧迫となり、明示的でないにせよ、受ける期待は拘束であっても自己の成長の促進剤にはならない(1, 2)。社会と自分を切り離し、浮遊することによって、他者と比較されない、つながりをもたなくてもよい、時限的な解放感を得る(3, 4)。

このような「社会」を自己の基盤として意識しない人々の台頭は、これまで連続として続いてきた歴史を持つ人間社会の崩壊を促すことになりかねないことに大方は気づくべきである。すなわち、自分で作り出した自己の一部でしかない、一人称の他者(厳密には投影された他者)はコミュニケーションの必要な他者ではなく、そこから歴史につながる社会は生まれにくい。個人の認識できる範囲において、意味を持つ「small world」は急速により矮小化しつつある。それ故に、現実の他者との試行錯誤によって築かれる紐帯は脆弱となり、このような個人個人のぶれを含んだ社会的共有の基盤は崩れてくる。この基盤崩壊は、努力なくして防ぐことはできない。われわれは個人間のぶれ、社会的な変動のあることを機に応じて意識化しなければ、社会を維持することが難しいことを確認し、補修しなければならない(ここで以下のことを確認しておきたい。社会は、個人の認識から表れることであるとともに、同じ空間、時間において「いる」相似形である他者と意識を交換することができる現象としての時間、空間の場を指す。規模やその人的構成を規定せずともわれわれにとつて認識の枠としての意味を持つ。)

団塊の世代に由来する個人化の歴史

三浦(2005)は、現代において、中流意識の変革、新たな階層化が生じていることを、調査データを読み解きながら述べている。団塊世代は、戦争経験によって自信を失った親世代の価値観の変化、同一性模索を見ながら、同時に人生の手本とすべきものがない中でなにかを得なければならないという思いを強く持ちながら成長してきた。そして、この団塊世代は、新たな社会的な動きをその時期に応じて経験しながら戦後の復興時代から高度経済成長時代を過ごす中で今よりはもっとまじな、ゆとりある、自分らしい生活を、そのためにはもっと勉強して「いい」学校へ、もっと仕事をして上の地位を目指してきた。そして、もっと自分らしい生活をしたいとの上昇指向が強く、いわば、“ボーイズ(ガールズ)・ビ・アンビシャス”(大志を抱く)世代であったとも言える。

戦前に対する戦後の反動的な個人尊重の風潮はこの団塊世代の生き方に大きく影響している。しかし、個人尊重の意味が戦前の家父長制へのアンチ・テーゼとして解釈されたことの弊害として、自分のごく周囲の世界へのこだわり、個人の生き方に互いにコメントすることを抑制し、プライベートな生活への干渉を極度に嫌う、一種の脱コミュニケーションを是認する価値観が一般化したことがその特徴として挙げられる。

団塊世代は戦後の自由な空気の中で育ったこともあり、新しいことを次々と経験し、かつ、自由にものを言うことができたので、その上の世代に比べて自己主張的である。したがって、学校や職場においてその人数が多いことも加わり、他への影響も大きかった世代である。

三浦(2005)の言う下流社会の発想につながっていると見えよう。モノのない時代を出発点として経済成長実現を担ってきた団塊世代は、いわば下流からより上の(目指せる程度の階層としての)中流を指向してきた。その結果、働き盛りであった1980年代から1990年代には多くは中流意識を持つにいたった。マイホームを持ち、無難に趣味を楽しみ、子ども(団塊ジュニア世代)のお稽古ごとや受験勉強にお金をかけてきた。しかし、団塊ジュニア世代は、小さな時から、合体ロボやバービー人形、リカちゃん人形と遊び、スーパー・マリオの登場によってテレビ・ゲームという新たな個人中心の遊び方に目覚め、集団で群れて遊ぶことはしなくなった。この傾向は、近年、一層過激となり、仮想された「画面」の中のキャラクターこそを、「現実」の人称として肯定することから、「ソト」の世界にいる「世間」の人々をこれに合わせて理解しようとする傾向すら見られる。倒置された現実こそが、当該者の現実になりつつあることも見られる。先に挙げた酒鬼薔薇聖斗事件、アニメのキャラクターのフィギュアへの嗜好、散発的

に路上ライブを行うほぼアマチュアのアイドル(ストリート・アイドル)へのファン(この種のライブでは数人から数十人の規模で、むしろあまり参加者がいないことが当事者個人の高揚感につながる)、メイド・ファッションへの興味などにその例を見ることができる。

個性を大事にすることを標榜した学校教育の場面では親である団塊世代のようににはがむしやらの強制を受けず、強力な人生モデルも示されない。その一方では横並びで放課後は塾で勉強し、お定まりの受験を意識させられ、親世代以上の学歴を期待される。しかし、団塊世代はと言えば、子どもの生活ぶりには関心はありながら、口を挟むのはそれまでの生き方からして自分らしくない、子どもは子どもなりの生き方であっていいと自分に言い聞かせて、子ども部屋にいる子どもには声をかけられない。そのような生活状況にあって、子どもは、自分の人生があまりに自由度の大きなものであることを持て余し、人生設計を描けない。基本的には役割としてのコミュニケーション儀式はあったが、明確に互いの考えを共有するには、基礎とする文化の違いは大きかった(過去の価値感の否定と新たな価値の生成、多様な選択肢を示すことが個性実現の土壌との錯覚、親世代の枠にはまらない言動にモデルを見つけ出しにくい子ども世代との交叉的な相互作用による。)

社会性の意味を科学するために

人が含まれる場をプロセスとして捉え、そこから得られるものがわれわれにとって現実的な意味あるものでなければならぬ。さらに、個人と個人によって作られている集団や社会の構成を同時に考えることであり、日常的な出来事を如何に総合的に検討するかが「社会的になる」ことである。

個々人はそれぞれに異なる歴史と環境を持っており、互いを理解することはそれぞれの異文化を理解することと言ってもいい。自分が多数者側にいるという意識はそうでない者を理解する心を損ないかねない。また、自分を理解してもらいたい、こう捉えて欲しいという自己呈示は、一方的な表現になってしまいやすい。人が複数いる(相互作用に直面しているとは限らない)場面においては、必ず、一方が自分を表出し、相手がこれを受け、その循環こそが心的な産物を生み、関係を、社会を構成する(この場を構成している個人からだけから発するわけではなく、場自体の自己生成の効果はある)。アイデンティティを持つことは自我の基盤を考える限りにおいて重要なことである。しかし、それは、決して一樣ではなく、階層性を持つものであり、個人(個性)から集団そして、地域、社会へと広がる連続体をなすものと捉えていいであろう。したがって、時には個性と社会的な帰属性とは拮抗すること

も少なくない。アイデンティティをどの段階で求めるかによって、他者との間に、あるいは、集団との間にボーダーを引かざるを得ないことになろう。このアイデンティティを自分の来し方を前提とした連綿とした歴史として一貫したものにしたい(換言すれば絶対性の追究)とするのではなく、相対的、変化し得るものとの認識こそが自我と所属性の適応を促すものであろう。一方、所与の社会的カテゴリーは、能動的な働きかけをせずとも、その選択肢を選ぶことで得られるものであり、便利である。しかし、それでは、カテゴリーの境界的な領域にあるものについては、適切に表現されず、アイデンティティは充足され難い。自分が社会的にどのような意味を持ち、働きをなしているのかを知るためには、自分らしさと相手に受容される(あるいは、親密感をもたれると予想される)自分づくりは必要である。表現することによって当該の相手に向けた効果が生じるのみではなく、それはその他の者にまで波及する社会性を持つ。

われわれが生活する社会的な環境に含まれている要因は互いにかかわっている。したがって、少なくとも他者とのつながりで個人を考えることもマクロに社会体制や文化についての検討を含めどのようなアプローチも研究的には可能である。ただし、研究は価値的に決して中性的であることはなく、どのような人間観、社会価値を踏まえてのことであるのかは重要なことがある。そして、その成果は、歴史的に評価されなければならない。基本的には、視点の違いのあることは考慮しなければならないが、人間の幸福や健康が目指されるべきことである。さらに、基本となることは、現実の生活の出来事に働く規則性を説明すること、その背景にある原理を探り、かつ、それを基にして、現在よりも適応的に行動する方法を人びとに提供することである。そのためにはいくつものアプローチが考えられるが、目指される目標は心理的健康を高め、価値ある生活の創出、すなわち、他者との適応的な関係を築き、相互協調的な社会を築くことこそが、心がけられなければならないことであろう。そのためにも、個人を結ぶコミュニケーションの働きを今以上に生かすことの効用は大きい。

コミュニケーション状況は豊かなのか？

携帯通信機器の普及率の高さからすると、「誰か」とコミュニケーションするために通信機器を保有していることは確かであり、対人的なコミュニケーション指向性が増していると言うことは間違いではない。その一方で、日常生活場面では、必ずしも対面のコミュニケーション状況は活発化していないさらいがある。自分を都合のいい環境のみ囲い込み、なじみの人とのいつもの空間の中でだけ自分を表現し合う自給自足的な様相を呈している。したがっ

て、日常的な場面においては、急激な変化やストレスを受けがたい状況に身をおいているものの、社会的な広がりのできにくい特徴が見られる。すなわち、柳田(2005)が指摘するように、ケータイ・ネットの急激な発達と共に、生の人間と人間が向き合う機会が減少してゆくことによる危険性は大きい。ケータイもインターネット通信も、生の人間との接触ではないので、いわば、対人的な関係の実践的なトレーニングができないと言える。友達がいない孤独な若者に比べれば、ケータイを介していつでも話を聞いてもらえる相談相手がいるのは決して悪いことではなく、その効用はある。

しかし、人工的な機器から発される文字を待つ(相手からいつ発されるかも定かではない)ことは、いかほどにわれわれの社会性を増してくれるのであろうか。むしろ、対人的な受身さと不信を助長するだけではなからうか。このような若者の特徴を考え合わせるならば、間接的なツールを通じてのコミュニケーション行動を期待し、そのような行動スタイルを積極的に受け入れていることを読み取ることはできるものの、それは、必ずしも「他者」と分かり合えることを前提にしているのではなく、あくまで、便利なツールを操作することを楽しんで見なすことができるのではなからうか。

アメリカのフォレスターリサーチ社は2005年12月、10代を中心とする若者が最近の先端の通信機器を活用し、昔の若者よりも人と多く“接続”しており、「若者は“コミュニケーション中毒”である」(同社)との調査結果を示している。その調査は、12歳から21歳の北米のオンラインユーザー5000人超を対象に実施したものである。その結果、インスタントメッセージ(IM)の使用率は83%、携帯電話の所有率は75%超になっていた。特に年少者の利用率が高く、IM使用率は15歳で87%、携帯電話の所有率は12~14歳で約5割に達したのに対し、成人のIM使用率は32%にとどまっていた。

ネット利用時間は、若年層全体では週平均約11時間。12~17歳の層では「週に20時間以上」が約2割にのぼっている。ゲーム利用は男女差があり、ゲーム機所有率は、12~17歳の男子で88%、同世代の女子では63%であった。また、男子の55%は、テレビ視聴時間よりゲーム時間の方が長いという。

携帯電話保有数は、2人以上の世帯でも80%を超え、単身者を含む世帯では90%に達している。ほぼ頭打ちの様相さえ呈している。1人で複数台保有の様子さえうかがわれる¹⁾。

このデータに見られるように、今やネットへのアクセス、ゲームは若者の生活の「一部」という域を超え、生活の中心となっているとも言える。程度差はあるが、日本でも類する状況にあると言っている。しかし、このような状況を

評して先の記事にあるように、「コミュニケーション中毒」と表現することにはここに示されたデータからだけでは同意できない。それは、これまで述べてきたように、基本的には、社会は個人の「仮想」世界となりつつあり、一人称のコミュニケーション状況が強まっている。加えて、柳田(2005)の述べているように、ケータイ・ネット依存は効率主義に支配された現代社会の最も象徴的な現象である。さらに、個人対個人を基調とする拡大するはずのコミュニケーションによるネットワークの伸張は決して情報の水準化や相互理解にむすびつくものではないアクションも含まれている。それは、「電車男」の出版・映画化、「生協の白石さん」の出版に見られるように、単に話題性が個人的ニーズを越えるという現象に例を見ることが出来る(大坊,2006)。コミュニケーション環境は、常に変遷しつつある。コミュニケーション行為が増大する現象自体は、ツールや環境に内在される手がかり性の多寡によるものでもある。この点を斟酌して、コミュニケーション行為に含まれる動機・意味を把握しなければならない。

まとめ

今後は、これまで以上に、コミュニケーションの基本機能にかかわる、記号化、解読を中心とする社会的スキルの会得、向上が必要になると考えられる(大坊, 2005a)。基本としては、視覚は多様なチャネルを確認でき、それぞれへのメッセージの分配が行える。共有できる空間は、他者の存在感を得られる、相手を感じることで出来る手がかりであり、コミットメントを増すのに重要である。時間(連

続的な相互作用が可能)は、相手との同時性を感じる事が出来るものであり、強化、比較を可能にする。これらの視点を十分に認識した上で互いの共通項を増す、高質の関係を築く努力が必要である。

引用文献

- 大坊郁夫 2005a コミュニケーションと記号としての身体. 対人社会心理学研究, 5, 1-5.
- 大坊郁夫編 2005b 社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション. ナカニシヤ出版
- 大坊郁夫 2006 若者のコミュニケーション環境. 言語, 35(3), 70-78.
- 三浦 展 2005 下流社会—新たな階層集団の出現—. 光文社
- 柳田邦男 2005 壊れる日本人—ケータイ・ネット依存症への告別—. 新潮社
- 財団法人日本青少年問題研究所 2006 高校生の友人関係と生活意識—日本・アメリカ・中国・韓国の4ヶ国比較—. <http://www1.odn.ne.jp/youth-study/>

註 1) : 電子情報技術産業協会は2005年12月14日、世界主要市場での携帯電話の累積加入件数が2004年から2007年にかけて年平均13.8%増加し、2007年には23億1700万件に達するとの調査結果を発表した。普及率は2004年の33.9%から2007年には48.7%に上昇する見込み。このようにモバイル通信機器の普及は世界的な規模であるが、日本での近年の増加傾向はとりわけ顕著である。

Communication forms reputable interpersonal relationships ; For maintenance and recuperation of sociality

Ikuko DAIBO(*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Just interpersonal relationships including similarity and discrepancy constitute the base of our society. Communication acts are required to substantiate our interpersonal relations, then the society could lead to make human history. In the context which an individual understands, our meaningful society is getting to be dwarfish quickly. Therefore, the social connection built by trial and error with the actual others becomes brittle, and the foundation of social sharing system including the gap between individuals is collapsing gradually. By the baby boomers after the war, the change of life style has been brought down the transition of value senses from their parent generation grown before the war and their child generation, too. What life style and value senses were not handed down for by the next generation has had negative effects on present interpersonal relations. People have their history and environment differently, and it can be said that understanding each other is equal understanding each foreign culture. After understanding the rules of the communication which provides wellbeing and health, the efforts to build reputable and cooperative society are expected strongly.

Keywords : interpersonal relationships, interpersonal communication, sociality, wellbeing